

俺がちゃんとした青春
をおくることはまち
がっているのだろうか、
いや間違っていない

ココアなな

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

八幡とオリヒロの話です

基本的に八幡と俺ガイルの人達是对立します

目次

一話目	1
二話目	19

一話目

平塚 「比企谷この舐めた作文は何だ？」

俺の目の前にいる国語教師平塚静先生は額にてをあてながら聞いてきた。

八幡 「はあ、確か高校生活を振り返ってっていうテーマの作文だったとおもいますが？」

平塚 「ならなんでこんなろけ話を書き上げてるんだ？」

八幡 「いえ、これが俺の高校生活なので」

平塚 「彼氏ができない私への嫌みか？というか本当にお前に彼女がいるのか？」

八幡「平塚先生その年で彼氏がいないのはやばくないですか？」

風が吹いた。

グーだ。

目に見えない速さで頬を掠めた……。

もう煽るのやめよう……怖い

八幡「す、すみませんでした。」

平塚「次は当てるぞ」

目がまじだ。本気とかいてまじと読むやつだ……彼氏ができないのはそういうところじゃ……

平塚「ギロツ」

何でわかるの?! 怖い

八幡 「んんっ。そこに書いてあるのは全部本当のことですよ」

平塚 「比企谷、見栄をはりたいのは分かるが嘘は良くないぞ」

八幡 「本当ですって」

平塚 「お前みたいに目が腐ってるやつに彼女がいるわけないだろ！」

えー理不尽。これは怒っていいよね？

八幡 「平塚先生、そういうこといってるから彼氏ができnグハア」

平塚 「次は気絶させるぞ！」

八幡 「は……………いガクッ」

てかもう気絶しかけましたよ!!

あーもう痛い痛い飛んでけーあわよくば平塚先生の方に飛んでけーあつそつちじやないよ!もつと右右あー教頭先生の方に飛んでいっちゃった……………

?「失礼します。平塚先生によろしくあつてきました」

ん?なんか聞いたことある声だぞ?

平塚「なんだ。椎名(しいな)どうした?」

椎名「いや、頼まれていたプリントを……………つて八幡どうしたの?大丈夫?」

八幡「よう花梨(かりん)」

そこには俺の幼馴染みで彼女である椎名花梨がいた……………いや本当にかわいいかわいすぎるだろ俺の彼女」

椎名「八幡!! かわいいって………ありがとう!」

八幡「へ? また声に出てた?」

椎名「うん!」

八幡「まじか……」

椎名「八幡もかつこいいよ!」

八幡「あ、ありがとう。」

平塚「おい、いちやつくな………ナグリタクナルダロ………んんっ椎名本当に比企谷の彼女なのか?」

椎名「はい!」

平塚 「本当だったのか……………すまなかつた比企谷」

八幡 「いえっ大丈夫です！」

椎名 「八幡はなにやってたの？」

ん？これは嫌な予感がする・・・

平塚 「ああ前に書いてもらった作文のことだな」

椎名 「八幡の作文？みてみたい！」

平塚 「ああここにあるぞ」

八幡 「まってまじで止めて」

椎名「えーいいじゃん。えーとどれどれ」

題名 高校生活を振り返って

比企谷八幡

青春とは悪であり欺瞞である。と本当は言いたいがかく言う俺もかわいい妹と天使のような彼女に囲まれ青春を謳歌しているとと言えるだろう。

・・・・・・中略

このように俺の高校生活は天使のような彼女のおかげで充実している。彼女のような素晴らしい女性がおれのとなりにおいてくれることは俺にとつて本当に奇跡のようなことである。よつてこれからも一生大切にしていきたいと思えます。

花梨「……………」

花梨は読んでるうちに顔が赤くなりうつむいてしまった……………てか俺も顔が熱いんだけど、、てかその平塚先生ニヤニヤしないの！恥ずかしくなってきたやうだろ！

花梨「八幡／＼／」

え！なにこの子滅茶苦茶可愛いんですけど……………やばい結婚したい」

花梨「っ！結婚／＼／……………八幡と結婚／＼／えへへ」

また声に出てたのか……………てかまじで可愛すぎない？

平塚「そこ！いつまでいちやついてるんだ！」

八幡&花梨「すいません！」

平塚 「お前ら仲いいな……………イイナカレシホシイナ」

八幡&花梨 「仲いいにきまつてるじゃないですか俺は（私は）花梨が（八幡）が大好きですから!!」

八幡&花梨 「／／／／」

平塚 「もうやだ。結婚したい」シクシク

八幡 「すみませんでした。それで俺はどうすれば?」

平塚 「君の心ない言葉や態度が私の心を傷つけたことは確かだ。なので、君には奉仕活動を命じる。罪には罰を与えないとな」

本当に傷いたのだろう。泣きそうになりながらそのように告げてきた。っていうか本当に泣いている!!このまま泣き続けられても困るのでそれに従うことにした

平塚「とりあえずついてきたまえ」

花梨「私も行っていいですかー?」

平塚「いいだろう」

しばらく着いていくと、そこは特別棟の四階の空き教室だった。

なに!!ここで殴られたりするんのか?花梨は絶対に守ってみせる!!と意気込んでいたら平塚先生が扉をひらいた

?「平塚先生教室に入るときはノックしてくださいといつもいっていますよね!」

平塚「すまん雪ノ下、次からは気を付ける」

雪ノ下「ハアいつもそのように言っているではないですか。でその目の腐った男の人と彼女は？」

初対面で目が腐っているとか言えんなコノアマ

平塚「そこの男は入部希望だ！」

八幡「二年F組比企谷町八幡です」

………つていうか入部ってなんだよ

花梨「へっ？八幡入部するの？」

八幡「しねーよ。つて平塚先生俺何も聞いてませんか？」

平塚「さつきもいっただろ、君の発言は私を傷つけた。よってここてまの部活動を命じる。異論反論は認めない！」

平塚「つとということで雪ノ下頼めるか？」

雪ノ下「断ります。彼のような気持ち悪い人といると虫酸がはしりますので。」

えーなに？この人いきなり辛辣すぎない？俺にたいして。つていうか花梨の前でおれのこと悪く言うと……………

花梨「なんですか！貴方は初対面の人にそのような酷いことが言えるのですか？そのような事を言う貴方の方が気持ち悪いし虫酸が走るのでやめてください!!」

始まった……………花梨が怒るとほんとに怖いからなー

八幡「花梨、いいからやめとけ」

花梨 「でも八幡が……………」

八幡 「俺は花梨がいれば他の人それだけで大丈夫だから」

花梨 「う、うん」

雪ノ下 「まあ先生からの頼みなのでお受けします。仕方なくですが」

雪ノ下 「それでそちらの彼女は？」

花梨 「八幡部活入るの？」

八幡 「まあ入りたくないけど」

花梨 「なら私はいります！」

八幡「いいのか？」

花梨「うん！八幡と一緒にいれる時間も増えるし！」

八幡「俺も花梨が入ってくれとうれしいよ！」

花梨「八幡／＼／」

八幡「花梨／＼／」

平塚「そこ！いちやつかない！………ハアケツコンシタイ」

平塚「んんっ、ということだあとと雪ノ下頼んだぞ！」

雪ノ下「つというか二人はどのような関係なの？」

八幡「俺の彼女だよ！」

雪ノ下「嘘よ。貴方のような人に彼女ができるわけがないでしょう？脅して彼女にしているのね、花梨さん安心して今助けてあげるわ」

だから花梨の前で……………

花梨「だからなんでそんなに酷いことがいえるの？脅されてもいないから！私の大好きな八幡を傷つけることいわないで!!」

雪ノ下「どうみても付き合っているように見えないから言ったまですよ。そのように言われたくないのであれば釣り合うように努力しなさい！」

花梨「だから！」

八幡「もういいよ花梨、今日はもう帰ろう」

花梨「う、うん」

雪ノ下「逃げるの？」

八幡「逃げてなにが悪いんだ？じゃあな」

雪ノ下「ちよつとまちなさ」

平塚「逃がすと思うか？」

八幡「先程入るといいましたが俺と花梨部活に入らないことにしたので」

平塚「そんなことが許されるとおもっているのか？」

八幡「てか無理やり部活に入れることも許されないことですよね？」

平塚「くつ、いいから部活に入れ、これは命令だ！」

八幡 「これ以上言うならば教育委員会に訴えますよ?」

平塚 「……………」

八幡 「さようなら」

……………帰り道

花梨 「ごめんね八幡。」 シュン

八幡 「なんで謝るんだよ?」

花梨 「だって」

八幡 「俺は花梨が反論してくれてうれしかったよ」

花梨 「でも！」

八幡 「ハア分かったなら、今日疲れたから一緒に寝てくれたら許してあげる」

花梨 「つうん／＼／＼………ハチマントネル／＼／＼」

八幡 「花梨、なんで顔が赤くなってるの？」ニヤニヤ

花梨 「もう、八幡のばか／＼／＼でも、ありがと！」

八幡 「お、おう／＼／＼」

でも本当にこれからどうなるんだろ………

二話目

翌日

ホームルームを終えて教室を出るとそこには花梨という名の天使……………いや花梨がいるのは全然いいんだよ普通に嬉しいし！でも隣になんか平塚先生いるんですけど……………

平塚「部活動へ行くぞ！」

八幡「だから昨日言ったじゃないですか、部活に入るつもりははないって」

平塚「昨日拒否権はないと言っただろう。いいからついてこい」

八幡「平塚先生にそんな権力ないですよね。……………花梨帰ろうぜ」

花梨「うん！」

平塚 「いいのか？三年で卒業できると思うなよ？」

八幡 「そしたら教育委員会に相談するので。それにもし三年で卒業できなかったとしても花梨と一緒にいければ俺は構わないので好きなだけどうぞ」

花梨 「／／／私も八幡といれるなら……………えへ／／／」

平塚 「くつ、生徒は先生の言うとおりにしておけばいいんだ！」

でもどうせ教育委員会へ報告されるのがこわくてなんにもできないだろーホラホラやってみろよw……………へ？なんで俺つれていかれてるの？てかこの人力強すぎない？ほんとに女？まるでゴリラみたいグハアッ

花梨 「平塚先生!!なにやってるんですか！八幡大丈夫？」

平塚 「こいつが教師の私に逆らうのがいけないんだ！」

？「平塚先生？」

平塚「……………」ビクッ

？「何をやっているんですか？平塚先生」

平塚「ただの教育です。教頭先生」

教頭「今私の目にはその生徒に暴力を振るっているようにみえましたが？」

平塚「暴力ですか？何をいつているんですか？そんなことするわけないじゃないですか」ビクビク

花梨「今八幡何もしていないのに突然殴ったところみました！」

教頭「と言っていますか？私もすっかりと見ましたが？まだ認めませんか？」

平塚「これは私なりの教育方法です！」

教頭「取り合えず話は校長室で聞きます。平塚先生行きますよ」

平塚「くっ、はい……………オボエトケヨ」

……………下校中

八幡「ありがと、花梨」

花梨「ううん。でも八幡のこと殴るとか平塚先生許せないよ」プンプン

俺のために怒ってくれてる花梨まじ天使

花梨「痛いところない？帰ったら痛いの痛いの飛んでけーってやってあげるね！」ニ
コッ

ヤバイ！今の見てるだけで痛いところ無くなったんだけど！！この笑顔みてたら可愛すぎて痛みとか無くなるわ、この笑顔がこの世に広まれば世界中から怪我とか病気が無くなるんじゃない」

花梨「……………／／／」

八幡「なら帰ったら頼もうか……………花梨どうした？顔赤いけど……………」

花梨「……………オレダケノモノ／／／」

八幡「あーもしかしたら声出てた？」

花梨「うん／／／」

あーマジかーまたやらかした。恥ずかし過ぎるわ／／／

花梨 「大丈夫だよ！こんな笑顔見せるの八幡にだけだよ／＼／」

八幡 「お、おう／＼／………んんっ今日も家くるか？」

花梨 「うん！………あ、あとさ手」

八幡 「ん？」

花梨 「手………手を繋いでもよろしいでしょうか」

八幡 「いいけど………なんで急に敬語になった？」

花梨 「は、恥ずかしかったから／＼／」

八幡 「／＼／手………ほらっ」

花梨 「う、うん／＼／」ギユッ

花梨……………可愛すぎないですかね!!

……………家

八幡&花梨「ただいまー」

?「おかえりー」

ああーここは天国か?

左に天使、前に可愛い妹の小町

もう死んでも悔いは……………あるわ花梨のウエディングドレス姿見ないで死ぬとかあり得ないからしかかも小町を残して死ぬるか? いや、死ねない

小町「なに、変なこと考えてんのごみーちゃん。花梨さんこんなごみーちゃんですみません!」

小町………なんで考えてることがわかるの!?

小町「そ・れ・は！小町がお兄ちゃんのこと大好きでだからだよ！」

八幡「俺も愛してるぞ小町！」

小町「そういうのは花梨さんに言ってあげな！」

花梨「へ？」

八幡「愛してるぞ花梨！」

花梨「／／／」テレテレ

八幡&小町「「可愛い………」」

花梨「止めてよ／／／」

八幡 「取り合えず入ろうぜ」

花梨 「う、うん／＼／＼」

花梨 「じゃあそろそろ帰るね」

小町 「また来て下さいね！」

八幡 「送ってくるわ」

花梨「ありがと！」

小町「そうやって送ってあげるとこ小町的にポイント高いよ！」

八幡「そうだなー高い高い」

……………帰り道

花梨「今日は災難だったね……………明日大丈夫かな？」

八幡「まあ教頭先生が何とかしてくるだろ。……………まあなにがあっても花梨は俺が守ってやる！」

花梨「は、八幡／＼……………私も八幡に何かあつたら守るからね！」

八幡「花梨……………」

花梨「八幡……………」

チュツ

花梨「じゃ、じゃあね／＼／」

八幡「お、おう／＼／」

その頃家では……………

プルルルプルルル

小町「もしもし比企谷です」

教頭「もしもし、総武高校ですけど。比企谷八幡君はいらつしやいますか？」

小町「い、いえいませんけど」

教頭「では平塚先生にお灸をすえておいたのですが、またなにかあつたら私のところにきてくださいと伝えて下さい」

小町「は、はい。わかりました」

ガチャ

何があつたんだろ？かえつたら聞いてみよ♪